

唄とことば・文化、琉球音楽における琉球諸語

マット・ギラン（国際基督教大学）

琉球諸島は日本のなかでも伝統音楽と舞台芸術（パフォーマンスアート）が日常生活の一部として残っている地域としてよく知られている。沖縄の人々はまさにこうした舞台芸術の宝庫として自負を持っている。他の国々をみても、同じような事例は数多いが、少なくとも20世紀半ば以降の琉球諸語の衰退をくいどめ、振興させようとする重要な課題のなかで、伝統音楽の果たす役割はたいへん大きい。ふだんの暮らしのなかで地元の言語を使う機会のない沖縄人でも、年配の世代が用いていた形の言語と、伝統音楽を通して通じ合えることも可能なのである。

琉球音楽で用いられる言語は地元の言語を反映したもののだが、沖縄の人々がふだん使う言語と同じというわけではない。これも他の国々の伝統音楽と伝統的文学の場合と同様だが、唄のことは、ふだんの話しことばでは用いない定型的な韻文で作られていて、標準的日常語とは異なる文学的語彙や文法が使われることが多い。さらに歌詞の意味に影響を与えない、意味のない言い回しや表現、また日常的にはまったく使われない外来の語彙などの影響もある。

琉球の唄は、また、本土の日本語の詩的表現、狭い島のなかでしか用いられない表現、琉球王府の支配階層である首里のエリートの用いる言語などいろいろな文化的影響のもとで発展した文学語を育ててきた。本報告では、古典的宮廷音楽から、現代のポップ・ミュージックに至るさまざまなジャンルの琉球の唄を取りあげ、音楽における言語の文化的意味を読み解いていくことにしたい。唄の歌詞は、言語が保存される重要な領域であり、なおかつ当該地域の過去から現在に至る社会的政治的状況を理解するうえで重要だということも述べていく。